書評

フジタヴァンテ編　奥平龍二監修『ミャンマー』

―慈しみの文化と伝統―

東京美術

石井和子

ミャンマー（ビルマ）といえば、最近では軍事政権に対しあくまで民主化を要求して闘っているスー・チー女史、古くは『ビルマの竪琴』で多少なりとも私たち日本人には馴染みがあるといえるが、ミャンマーの文化についてどのくらい知識があるかといえば、ほとんど無いに等しいのではなかろうか。ミャンマーについてよくいわれることは、人々が「優しい笑みをたたえ心穏やかだ」ということである。このような人々をはぐくんできたものは何なのか。そしてその文化は？このような疑問に答えてくれるのが本書である。

本書の内容は現代に生きる伝統的慣習・信仰、文化に焦点をあてたもので、「序」に引き続き「家族の慣習」「家庭と信仰生活」「ビルマ人の生活リズムと仏教」「女性と仏教修行」「社会生活」「芸能」「仏教の受容」「須弥山世界」といった項目に関して第一線のビルマ文化研究者が簡潔で要を得た解説を行っている。

本書で興味深かったのは次のような「序」の部分の解説であった。

ビルマ人の意識の奥に強く潜んでいるものは仏教の教えの根本にある世の「無常」であり、「無常」を目のあたりにするのは人の死に遭遇した時であるという。ビルマ人は「死」と向き合いそれを前向きの姿勢でありのまま受けいれようとする。そしてビルマの人々の優しい笑みには「生きとし生けるもの」がやがて「死」に往く共通の運命を背負ったもの同士の「慈しみ」と「いたわり」の心が潜んでいるのであり、人間いつかかならず「死」を迎えなければならないという厳粛な事実を強く意識するビルマ人には、物事にこだわる気持ちも、怒ることも、貪欲になることも、あまり意味がなく、いつも平常心を保つ努力をするという。

筆者の研究地域であるジャワの人々は、まわりとの「和」を保ち、他人も自分も心穏やかに生きられるよう努力する。しかし、そこにはビルマ人のような「死に往く共通の運命を背負ったもの同士」という意識は感じられない。これは受容した宗教の違いによるものであろうか。

本書でもう一つ筆者にとって興味深かったのは、ミャンマーでは瞑想が盛んであるとの記述であった。敬虔な信者でなくとも週末や会社の休みを利用して、ある特定期間を瞑想院で過ごす人が多いという。瞑想院は全国各地にあり、人々は「精神修養」や「命の洗濯」のために赴き、2週間以上滞在する者には圧倒的に女性が多いとされる。日本で「週末に瞑想にいく」といったら、あやしい宗教団体の会員と間違えられてしまいそうである。ミャンマーではまさに仏教が生活の中に生きているのである。

本書は「ミャンマー文化の手引書」としての役割を余すこと無く発揮している。写真もふんだんにつかわれ、全体の構成も読者への配慮がうかがわれる。カラー写真は躍動的で美しい。

本書のような手引書が他の東南アジア各国についてもできれば、この地域への理解は大いに深まるに違いない。